

ISSN 2186 – 3989

# 中国東北シャーマニズムの現状と課題

—エヴェンキ族のシャーマニズム文化とその近代化を例として—

小野田 亮、二ノ宮 聡

Current Status and Issues of Shamanism in Northeast China: A Case Study of the Evenki  
Shamanistic Culture and Modernization

Ryo Onoda, Satoshi Ninomiya

北 陸 大 学 紀 要  
第57号(2024年9月)抜刷

# 中国東北シャーマニズムの現状と課題

## —エヴェンキ族のシャーマニズム文化とその近代化を例として—

小野田 亮\*、二ノ宮 聡\*\*

Current Status and Issues of Shamanism in Northeast China: A Case Study  
of the Evenki Shamanistic Culture and Modernization

Ryo Onoda\*, Satoshi Ninomiya\*\*

*Received August 5, 2024*

*Accepted August 22, 2024*

### Abstract

This study delves into the cultural and religious practices of the Evenki people, focusing particularly on their shamanism and totem worship. Shamanism, originating in the cold regions of Northern Asia, Northern Europe, and North America, is a natural religion practiced by various ethnic groups. In China, Northern ethnic groups, especially the Tungusic people like the Manchu, Mongolian, Hezhen, and Evenki, have preserved shamanistic customs and beliefs. This research highlights the significance of shamanistic rituals and the ideological worship of gods and ancestors among these communities. The study explores the historical and cultural evolution of Evenki shamanism, from primitive totem worship to its role as a spiritual leader in their society.

The research further examines the influence of modernity and tourism on the traditional shamanistic practices of the Evenki. It assesses the impact of these changes on the preservation and adaptation of their cultural heritage. Through detailed analysis, this study aims to contribute to the understanding of the spiritual and cultural dimensions of Evenki shamanism and its relevance in contemporary society.

**Key Words :** Shamanism, Totem Worship, Evenki People, Rituals, Cultural Adaptation

---

\* 延辺大学外国学院日語系博士研究生 College of Foreign Languages, Yanbian University

\*\* 北陸大学国際コミュニケーション学部 Faculty of International Communication, Hokuriku University

## はじめに

シャーマニズムは、北緯 35 度から 70 度の北アジア、北欧、北米の寒冷地域で起源を持つ自然宗教であり、多くの民族が信仰している。特に中国の北方民族やツングース系民族（満族、オロチョン族、シベ族、エヴェンキ族、ナナイ族など）は、シャーマニズムを信仰またはその風俗習慣を保持している。これらの地域はシャーマニズムの故郷と言われる。現在の中国では、黒竜江省、吉林省、遼寧省などの東北地方と内モンゴルの民族がシャーマニズムを保持している。また、ロシアのシベリア地域などの北方民族もその風俗習慣を部分的に保持している。シャーマニズムは原始的な要素を持ちながらも、民間信仰の荘厳さと北方先住民族の初期文化の素朴さが見て取れる。

シャーマニズムの名称はツングース語の「saman」に由来し、「明確に理解する」または「明確に知る」という意味を持つ。シャーマンは神意を理解し、神の使者や人と神の仲介者としての役割を果たす賢者である。ツングース民族はこの言葉をそのまま使用し、シャーマンを「神の意を理解し知る人」としている。シャーマニズムは氏族社会で始まり、主に母系社会で発展したが、その形式は社会の発展とともに変化していき、その精神的な本質と内容は伝承され続けている。シャーマニズム文化には、生活言語だけでなく、衣装、食べ物、家庭用器具など多様な民間芸術も含まれており、この消えつつある宗教文化遺産の再発見は、人類の精神の原型を探る上で大きな価値を持っている。

中でもシャーマニズムの儀式は最も重要な要素であり、神々と祖先を崇拝する一種のイデオロギーを持つ。サンスクリット語の「kalp」に由来し、もともと仏教密教の経典における諸仏、菩薩、天部などの儀式の規則を指していたが、後に儀礼や祭祀、王朝の法規などの一般的な名称となった。

中国東北地方のシャーマニズムの儀式は、民族ごとに異なるが、神帽をかぶり、神袍を着用し、神鼓や神鞭を持って儀式を行う。シャーマンは儀式の中で踊りを通じて神々と交流し、恍惚状態に入る。この方法でシャーマンは神々に幸福を祈願し、病気を治癒し、妖魔を退治する。シャーマンの儀式は中国語で「跳神」とも呼ばれ、人間と神々を結ぶ中介者としての役割を果たす。跳神はいわゆる民間の巫ト風俗、古代宗教の遺風であり、その目的は災いを取り除き、病気を治し、邪気を払うことなどである。儀式では香案や神位が設けられ、香を焚き、神を招いて祈願する。跳神の儀式は非常に激しく、原始的な呪術の要素を含んでいるが、その宗教的特徴ゆえに精神のおよび文化的遺産として中国東北地域に存在し、重要な研究価値を持っている。

## 中国におけるシャーマニズムの先行研究

シャーマニズムの研究は帝政ロシアにより先鞭がつけられた。アルセーニエフの『デルス・ウザーラ』（1922）はナナイ族の生活技術と自然観を描写しており、彼の探検記録は黒竜江からウスリー江に至る地域を詳細に記録している。アルセーニエフは冒険家としてナナイ族との交流を深め、その文化を記録した。さらに、シロコゴロフの『北方ツングースの社会組織』（1933）は、シャーマニズムに関する最初の体系的な研究として位置づけられている。この著作は後のシャーマニズム研究の基礎となり、多くの研究者が参照する重要な文献である。

中国においては、清朝になると東北地方への入植が始まり、シャーマニズムについての記述も増えていった。シャーマニズム信仰に関連する最古の語彙は清朝四年の『三朝北盟会編』に見られ、「シャーマン」という言葉は女真族の言語で「察瑪（珊蛮）」と訳された。中国初のシャーマニズムに関する体系的な著作は 1747 年に出版された『欽定満州祭神祭天典禮』であり、

この文書で「シャーマン」という言葉が正式に使用され、多くのシャーマニズムの文化と宗教の概念が紹介された。例えば、シャーマンの神歌、儀式、礼器、そして天地神命などが含まれている。本書は当初満文で書かれていたが、1780年に中国語に翻訳され、『四庫全書』に収録され、現在でもシャーマニズム研究において非常に重要な資料となっている。このように、帝政ロシアと中国における初期のシャーマニズム研究は、後の研究の基礎を築き、多くの重要な資料を提供した。

清朝後半期においてシャーマニズムの研究は大きく進展し、儀式に関する文献として『満州跳神還願儀式』(1829)や『恭祭神杆礼節之冊』(1898)などが編集された。しかし、日本の帝国主義による満州における傀儡政権の設立後、中国におけるシャーマニズム研究は停滞することとなる。再び研究が進展するのは、新中国成立後の1953年に全国的な民族識別調査が実施された時期である。1956年には少数民族の言語・歴史・社会の調査が行われ、中央民族事務委員会は1958年に『中国少数民族簡史』、『中国少数民族言語簡志』および『中国少数民族自治地方概況』の編纂を開始した。このプロジェクトは文化大革命によって一時中断されたが、文化大革命終了後、多くの少数民族社会歴史に関する報告書が出版され、それらにはシャーマニズムに関する資料が多く含まれていた。さらに、1960年前後に行われた華北地域のシャーマニズム文化遺産の調査では、秋浦『鄂温克人的原始社会形態』(1962)が特定の民族に対するシャーマニズム研究の基礎を築いた。

改革開放後、中国におけるシャーマニズム研究はさらに発展し、実地調査報告に加え、理論研究、地域比較研究、芸術や文学の研究、歴史的人物に関する研究など多岐にわたる。この時期以降のシャーマニズム研究に関しては、大量の成果があり、既に様々な形で紹介されている。以下は吉林師範大学東北亜研究院の李命権(2014)が行った整理に依拠したい。

満族やモンゴル族には大量のシャーマン神話やシャーマン家系譜が存在し、20世紀80年代以降、これらの資料に基づいた、秋浦の『薩満教研究』(1985)、傅月光の『薩満教与神話』(1990)、伍韜の『薩満教の変遷与衰落』(1981)、岳青の『中国的薩満教』(1981)などの代表的な成果が発表された。特に、秋浦の『薩満教研究』は、歴史学、考古学、人類学の観点からツングース語、モンゴル語、トルコ語のシャーマニズム文化を調査・比較し、原始宗教のあらゆる側面に触れている点で参考文献として多く取り上げられている。

1990年以降、シャーマニズムに関する国際学術会議が次々と開催され、その研究はさらに発展した。富育光の『薩満論』(2000)は、中国北方文化における初期のシャーマニズムの発展過程を詳細に描き、シャーマンが宗族の聖人としての地位を持つことを証明した。また、シャーマニズムの原始神論と迷信の枠組み内での心理学的分析を行い、造形芸術とその象徴的意味についても解説している。さらに、シャーマニズムの初期の地理的範囲と古代文化遺産を歴史的観点から描写し、厳しい環境下で古代の人々がどのように生活水準を向上させたかについても論じている。孟慧英の『塵封の偶像——薩満教觀念研究』(2000)は、シャーマニズムのシンボルシステムを靈魂、神々、神聖性の観点から分析し、動物神、自然神、養育神などの主要な神々への信仰について詳細に記述している。郭淑雲の『原始生態文化——薩満教透視』(2001)は、多くの出土資料を基にして、中国東北地方地域を中心に、シャーマニズム文化の多角的な分析を行っており、シャーマニズムの思想、自然科学、予知、治療、審判、象徴、造形芸術に関する内容を網羅している。特にシャーマニズムの宇宙観に関する解釈では、天・地・人の三界觀念の原始形態とその変遷にまで触れられている。

シャーマニズムに関しては、理論研究に加えて比較研究および芸術研究も広く行われている。比較研究の分野においては、劉曉萌と定宜庄の『薩満教与東北民族』(1990)が、遊牧生活や漁獵を営む東北少数民族の原始シャーマニズム信仰の内容を説明し、親族関係を中心とした社会経済および文化関係の長期的な分析を行っている。また、富育光と孟慧英の『満族薩満教研究』(1991)は、満族シャーマニズムの各側面およびその歴史の変遷を詳細に論じている。

シャーマニズムの芸術研究も活発であり、特にシャーマンたちが神々を讃える神曲に関する研究が注目されている。これらの神曲は、その歌詞や舞踊のスタイルが際立った芸術的質を持ち、東アジア全域で広く伝播している。シャーマニズム音楽に関する主要な研究の一つに、劉貴騰の『満族薩満楽器研究』（1999）があり、さまざまな楽器の分類、それぞれの象徴的意味と特徴、ならびに満族の環境、文化的地位、社会的機能について詳細に論じている。さらに、富育光の『薩満芸術論』（2009）は、これまでのシャーマン芸術を体系的に整理し、今後のシャーマン芸術理論の発展に向けた基盤を構築している。

シャーマニズムは文学にも顕著な影響を及ぼしており、地域色豊かな民間文学として、詩歌や伝説、古代宗教の逸話を通じて民族の信仰を文学的に表現している。これらのシャーマニズム文学は主に口承文学や演劇の形で伝えられており、その研究成果として、仁欽道爾吉と郎櫻の『阿勒泰語系民族叙事文学与薩満文化』（1990）が挙げられる。この研究は、アルタイ語系民族の叙事文学とシャーマニズム文化の関係を詳述し、シャーマニズム文学の重要性を明確にしている。

さらに、神話研究においては、谷穎の『満族薩満神話研究』（2012）がある。彼の研究は、満族の神話を自然神話、動植物神話、祈祷神話、英雄神話、シャーマン自らの神話の五つのタイプに分類し、詳細に分析している。神話はシャーマニズム文化の「教義」を伝承し、儀式的説明役も果たしている。これらの神話は書面資料だけでなく、泥塑や木彫の神像、聖器、聖衣のシンボルシステムにも伝えられ、共通の民族精神と宗教文化を反映している。シャーマニズムの神話は、満族文化の歴史と精神を反映する重要な資源であり、その伝承に寄与している。

以上のように、シャーマニズムの基本的な様相や機能に関する研究はすでに多くの点で明らかにされており、芸術、服飾、音楽、文学など、各論にわたる研究も進展している。特に中国東北地方のシャーマニズムでは、満族に関する研究が顕著である。

よって本稿では、ツングース系民族の中では満族に次いで人数が多いエヴェンキ族の信仰形態とシャーマニズムの基本的様相を描写する。エヴェンキ族は先祖神、氏神、火の神、山の神、熊神、家畜神など多様な神々を崇拝し、伝統的なシャーマニズム信仰を維持している。これらの信仰形態は、エヴェンキ族の社会的結束や文化的アイデンティティの維持に重要な役割を果たしている。

また、シャーマニズムの近代化および観光文化的資源としての価値についても考察する。近年、楊樸・楊陽『二人転与薩満研究』（2016）などの研究において、シャーマニズムは観光文化的資源としての価値があると指摘されている。エヴェンキ族のシャーマニズム儀礼も観光客を惹きつけ、地域経済の活性化に寄与する事例が報告されている。しかし、こうした近代化が伝統的信仰に与える影響については継続的な研究が求められており、本稿はその研究の一助となることを目指したい。

## エヴェンキ族のトーテム崇拝とシャーマニズム

「エヴェンキ」は彼らの自称で、「大山林の中に住む人々」という意味を持つ。1689年に中露間で締結された「ネルチンスク条約」（黒竜江・外興安嶺〔スタノヴォイ山脈〕を境界とする）によって、エヴェンキ族は現在のロシアと中国の領域に分けられた。中国では古くからエヴェンキに関する断片的な記録はあるものの、近代の研究資料は稀少で、原始信仰に関する資料も少ない。

エヴェンキ族の原始信仰文化は長い歴史的発展過程を経てきた。彼らの生産・生活様式が単純であったため、他の少数民族と同様に、民族の起源に対し神秘的な色彩が付与されていた。特に、初期のトーテム崇拝やシャーマニズムでは、人類と自然界の特定の動物や植物に親縁関

係や特別な関係があると考えられていた。

エヴェンキ族のトーテム崇拝は、熊、鹿、狼、蛇、亀、鷲、大木、穀物などがトーテムとして崇拝された。一方、シャーマニズムはエヴェンキ族の原始信仰の最高層次であり、万物有霊論、自然崇拝、トーテム崇拝、鬼魂および祖先崇拝を基盤として発展してきた。シャーマンはエヴェンキ族の宗教的指導者であり、彼らの精神的な支柱としての役割を果たしてきた。シャーマンは儀式を通じて神々や精霊と交流し、コミュニティの健康と幸福を守るための重要な存在であった。こうして形成されたエヴェンキ族の原始信仰文化は彼らの生活様式や自然環境との関わりと長い歴史を経て現在まで伝えられてきたものである。

そこで本稿では、先ず、秋浦（1962）の研究成果を参考にしつつ、いくつかの新しい成果を踏まえて、エヴェンキ族のトーテム崇拝とシャーマニズムの概況について改めて整理をしたい。

## トーテム崇拝とトナカイ

エヴェンキ族は、広大なシベリアの森林でトナカイを飼育し、「使鹿」として知られている。彼らの生活様式は他の原始時代の少数民族と同様に、低い生産力と遅れた科学文化により、人類の起源に近い生活を現代に残していた。彼らは自然界の特定の動植物との間に親縁関係や特別な関係があると信じており、これがトーテム崇拝の基盤となった。長い発展の過程で、トーテム観念が形成され、特定の動植物が民族や氏族の守護者や象徴として崇拝されるようになった。

「トーテム」という言葉は、ネイティブ・アメリカンの言語で「部族・氏族の親族」を意味する。トーテム崇拝は原始的な信仰形態であり、実際には、動植物崇拝と靈魂崇拝（または祖先崇拝）が結びついた宗教形式である。各少数民族の社会発展段階や歴史的・自然地理的環境の違いにより、トーテム崇拝の対象は異なる。エヴェンキ族もトーテム崇拝の対象物を持っており、狩猟を主要な生産方式とし、「使鹿」とも呼ばれたエヴェンキ族は、主にトナカイと熊を自分たちのトーテムとして崇拝していた。

エヴェンキ族は古くからシベリアの原生林でトナカイと共生しており、その気候と植物はトナカイの成長と繁殖に特に適していた。本来、トナカイはエヴェンキ族の獲物であり、生活資料の主要な供給源だった。トナカイは食物や衣類の材料として使われ、特にトナカイの皮は衣類を作るための重要な資源になった。群れを成すトナカイはエヴェンキ族の生活の支えとなり、狩猟生産の発展に伴い、エヴェンキ族はトナカイによる恩恵の余剰を持ちはじめ、さまざまな方法で狩猟物を保存した。また、捕獲したトナカイの子供を食糧備蓄として家畜化することもあった。

こうしたトナカイ業の発生は、エヴェンキ族の狩猟を中心とした生産方式を変え、彼らの生活を根本的に変えた。エヴェンキ族の伝統的なトナカイ文化もトナカイ業の発展の中で育まれ、トナカイを中心とした生産技能、生活様式、風俗習慣、宗教信仰、文学芸術を一体とする独自の伝統的なトナカイ文化を創り出した。

エヴェンキ族はトナカイの実用価値を十分に認識しており、トナカイは彼らの生活の中で重要な食糧と衣服の源であり、精神生活の支柱でもある。よって、シャーマニズム信仰にもトナカイ崇拝が表れており、伝統的なシャーマンの祭祀儀式では、トナカイは神界への媒介と見なされ、祭祀用品として災いを避け、病気を治療するために供えられた。例えば、シャーマンは鹿角のついた神帽をかぶり、その鹿角の枝の数がシャーマンのランクを示している。初めてシャーマンになる者は三つ枝の神帽をかぶり、3～5年ごとに祭神儀式と法術を行うたびに一段階昇格し、三つ枝、六つ枝と順次昇進し、最高ランクである九つ枝に達する。

エヴェンキ族の伝統的な生活では、日常の話題の中心はトナカイであり、彼らの生活にはト



ナカイに関する多くの風俗や禁忌が含まれている。例えば、彼らはトナカイの頭蓋骨と足の骨を注意深く集め、木の上に掛けたり、森の中の木台に置いたりする。また、トナカイの各部位を少しずつ切り取り、頭皮で包み、全体を象徴する形で木柱の上の特別な小箱に保存し、供養する。多くのトナカイの頭皮包みを持つ家ほど、その家の運が良いとされる。

エヴェンキ族のトナカイ崇拝は、トナカイが彼らの生活と文化にとって不可欠な存在であることを象徴しており、その信仰は彼らの生活様式や精神性に深く根ざしている。彼らはトナカイと共生する関係を保ち、トナカイを飼うためにトナカイとともに移動し、深い山中で生活することで、その生産生活と民族文化を今なお保存している。このようにして、エヴェンキ族のトナカイ文化は発展をしてきたのである。

## トーテム崇拝と熊

エヴェンキ族の熊トーテム崇拝は、彼らの生存する自然環境、熊の身体的特徴、および彼らの思考意識など多くの要素が深く関係している。自然環境が厳しい時代、エヴェンキ族の生命は常に野生動物の脅威にさらされていた。凶猛な動物は、石器、槍、弓矢を使用していた原始漁獵時代のエヴェンキ族を頻繁に脅かしていた。特に熊は森林の中で最も一般的に見られる凶猛な動物であり、怒った時には非常に力強く、人間には太刀打ちできなかった。

エヴェンキ族にとって、この脅威的な森林の猛獣は親族関係にあると考えられており、特に熊の身体的特徴は、エヴェンキ族の先祖が熊との血縁関係や親族関係を想像する要因となった。例えば、熊は後肢で直立歩行することができ、前脚で食べ物をつかんで口に運び、熊が何かを見る時に手で光を遮るなどの行動が人間に似ている。このような外見と特性は他の野生動物には見られないものであり、これがエヴェンキ族が熊を人間の祖先と見なす重要な根拠となっている。長い狩猟の年月を経て、熊は徐々にエヴェンキ族にとって崇拝の対象であるトーテムとなっていく。

エヴェンキ族が熊を自民族のトーテムとして崇拝する表現方法は、他の北方少数民族とは異なり、崇拝対象の標識やトーテム象徴物がない。彼らの表現方法は、主に呼称、禁忌、熊送りの儀式などの面に見られる。宗教的な儀礼を守る限り、彼らは熊の脅威を避けることができ、熊からの助けや保護を得ることができると信じていた。そのため、エヴェンキ族には、熊と人間の間に血縁関係や親族関係があるとする多くの神話伝説が伝わっている。例えば、「熊はもとも人間の祖先であり、天の意志に反したために、二本足で歩く人間から四本足で歩く獣に変えられた」という話などである。

エヴェンキ族は熊を人間の親族や祖先として崇拝しているため、熊を直接名前で呼ぶことはなく、強い尊敬の念を込めた血縁関係を示す称号を使用している。雄の熊を「合克」と呼び、これは「曾祖父」を意味し、雌の熊を「額沃」と呼び、これは「曾祖母」を意味する。これらの呼称を使うことで、彼らは熊を自身の祖先および最長老として尊び、自分たちを熊の「後裔」または子孫と見なしている。これは同時に、エヴェンキ族が熊に対して畏怖、依存といった感情を抱いていることの表れでもある。

エヴェンキ族は漁獵時代においては、熊をトーテムとして崇拝していた為、狩ることを厳禁していた。彼らは自衛のために熊を殺すことはあったが、飢餓状態でもない限り、熊の肉を食べることはなかった。狩猟中に偶然熊に遭遇した場合でも、静かに隠れて迂回し、狩猟道具を置いて敬意を示すことが一般的だった。彼らが熊を尊敬し、祖先と見なし回避していたことがわかる一例である。

しかし、原始的な狩猟生活に従事する中で、生活の糧として熊を完全に排除することは難しかった。15世紀以降、トーテム観念は次第に薄れ、シャーマニズムの興隆により、エヴェンキ

族は次第に熊を狩り、熊肉を食料源の一部とした。一方で熊をトーテムとして崇拝し、他方で熊を狩り熊肉を食べるという矛盾した行動は、原始的な社会における生存本能の表れであったといえよう。このため、長い年月を経て、熊狩り、祭熊、熊肉の食事、そして熊の弔いに至るまで、複雑で厳粛な儀式が生まれた。

エヴェンキ族は狩猟、特に熊狩りにおいて、多くの禁忌を互いに守っている。例えば、「山へ狩りに行く」といった言葉を忌み嫌い、獲物を捕まえた場合も「天が何かを授けてくれた」と言う。また、熊を殺したと言わず、「熊が眠った」と表現する。「エヴェンキ族が熊を殺したのではなく、ロシア人が熊を殺した」と言うこともある。彼らは熊を殺すためのナイフを「何も切れない鈍物」を意味する「刻爾根基」と呼び、後に伝来した銃を「吹き矢筒」を意味する「呼翁基」と呼ぶ。このように、総じて、エヴェンキ族は狩猟生活の中で獣を狩る行為やナイフ、銃の凶器性を言葉にすることを忌み嫌う。

エヴェンキ族は熊肉を食べる際にも一連の儀式と習慣を守っている。熊を狩猟した後、その遺体はエヴェンキ族の女性がトナカイを使って集落まで運ぶ。熊の皮を剥ぐ際には、まず睾丸を切り取り、木に掛けてから皮を剥ぐ。皮を剥ぐ際には動脈を切断せず、血を心臓に絞り込む。また、熊の首を切る際には、まず小腸を取り出して熊の頭に三回巻きつけてから切断する。

熊肉を食べる前に、「烏力楞」（「子孫たち」または「一緒に住む人々」という意味で、血縁関係で結ばれた原始家族共同体）の全体メンバーが「撮羅子」と呼ばれる火堆（焚き火）の周りに集まる。最年長者が神位に座り、他の人々が火を囲んで円形に座る。長者は最初に熊油を火に捧げ、火が燃え上がると皆で「火が笑った」と叫び、カラスの鳴き声を真似する。これはエヴェンキの者ではなくカラスが熊肉を食べていることを表明し、「カラスがあなたの肉を食べているのであって、エヴェンキの者が食べているのではない」と言い続ける。その後、長者が熊油を皆に分け、皆がそれを飲んでから熊肉を食べ始める。

まず前列の三人がそれぞれ三さじの熊肉を食べ、それを次の三人に渡す。このように三周した後で自由に熊肉を食べることができる。男性は熊の前肢や尾は食べることができず、これを食べると熊に武器を奪われると信じられている。また、熊の脳、目、食道、心臓、肝臓、肺などの部位は絶対に食べてはならず、これを食べると神を怒らせ、狩猟や民族の繁栄に不幸をもたらすと信じられている。

他の動物、例えば犬や鹿などの内臓も食べることが禁じられていたが、後に犬や鹿などの内臓は木に2、3日掛けてから食べるようになった。このような習慣は近代に至るまで守られてきた。

エヴェンキ族が熊をトーテムとして崇拝する中で、熊送りの儀式は最も複雑で厳粛な表現形式である。彼らは熊を狩った後、必ず熊送りを行う。熊送りを行わないと、熊の骨を無造作に捨てることになり、警戒した熊は巣穴に入らず冬眠しなくなる。その結果、熊を狩るのが難しくなるだけでなく、熊に襲われる危険も増すと考えられているからである。これらの風習や儀式は、エヴェンキ族が熊を祖先として崇拝し、深い尊敬の念を抱いていることを示している。

エヴェンキ族は熊肉を食べ終えた後、またはその皮を剥いだ後、熊の心臓、喉、舌、鼻、首の骨、脚の関節骨、掌、右上肋骨2本、右下肋骨3本、左上肋骨3本、左下肋骨2本を集め、柵樹（白樺）の枝で縛り、さらに柳の枝で六重に縛る。その後、茂った大きな松の木を選び、隣接する2本の木の内側を平らに削り、横に12本の深い溝を彫り、木炭、生血、様々な野花で平面を色とりどりに装飾する。熊の頭の向きにある第6の溝の両側に切れ込みを入れ、熊の目を埋め込む。これらが完了した後、束ねた熊の骨を予め設置した2本の木の間の横梁に吊るす。儀式に参加する人々は、親族が亡くなったように顔を覆って泣き真似をし、熊の骨を煙で浄化するために風上に焚火を置いて火を点ける。ちなみに人を害した熊に対しては熊送りを行わず、皮を剥いで利用する以外の部分はすべて捨てる。

エヴェンキ族は熊の骨を熊の霊が宿る場所と考えており、熊の精神と生命の帰宿点と見なしている。そのため、熊の骨を特に重要視し、この厳粛な熊送りの儀式を通じて熊の霊に対する



祈り、慰め、供養を表現している。この儀式は非常に敬虔であるので、「烏力楞」の全員や氏族全体が参加することが多い。儀式には神秘的な原始宗教の色彩に満ちており、熊の霊が彼らの生命を守り、狩猟に幸運をもたらすと信じている。

以上のように、エヴェンキ族の熊トーテム崇拜は、自然環境、熊の身体的特徴、そしてエヴェンキ族の思考意識の多様な要素が絡み合って成立している。これらの儀式や風習を通じて、エヴェンキ族は熊を祖先として崇拜し、深い尊敬と畏怖の念を抱いていることがわかる。

## エヴェンキ族のシャーマニズム

狩猟民であるエヴェンキ族のシャーマニズム信仰は、万物に霊が宿るとするアニミズム、自然崇拜、トーテム崇拜、霊魂と祖先崇拜の基礎の上に発展したものである。シャーマニズムは他の信仰内容や形式よりも複雑であり、原始信仰の最高段階と言われている。彼らは、シャーマンが神々と交信できる存在であり、強大な法術を持っていると信じている。例えば、シャーマンは法術によって病人のために悪霊を追い払い、人間やトナカイの安全を守り、狩人のために祝福を祈ることができると考えている。

シャーマンの主要な宗教活動は、病人のために神を祭り、悪霊を追い払うことや、狩猟の豊作を祈ることである。シャーマンが儀式を行う際には、白いトナカイを供物として捧げる。白いトナカイがない場合は、犬や鹿を犠牲にし、「舍臥克神」（祖先神）や「瑪魯神」（諸神の総称）に供える。人が病気になる、魂が体を離れたと考えられ、招魂儀式を行う。神を祭る形式には多くの手順があり、白いトナカイの処理も複雑で、皮を剥ぐ方法も通常とは異なる。

祭神の儀式には細かい作法があり、祭神のための白いトナカイの処理も複雑である。まず、「撮羅子」の東南角に祭祀棚を設置し、トナカイの心臓、肝臓、肺、食道、頭などを一緒に棚の上に置き、トナカイの頭を日の出の方向に向ける。他の部位は煮て「瑪魯神」に供え、人間は食べない。「撮羅子」の中の「瑪魯神」の前に柵（白樺）の枝を敷き、神位の前に2本の大きな松の杭を立て、色とりどりの布を結びつける。杭の上端にはトナカイの血を塗る。

すべての準備が整うと、シャーマンは儀式用の服を着て、円形のシャーマンドラム（温都翁）を手にして儀式を始める。儀式中、シャーマンは目を微かに開閉しながら呪文を唱え、手足を動かして神や鬼の憑依状態を装い、神や鬼と対話しているかのように振る舞う。これにより、神や鬼の境界に入り込み、病人のために悪霊を追い払い、狩猟の成功を祈る。

また、人が死んだ後にもシャーマンが跳神（神を呼び降ろす儀式）を行う。この儀式をエヴェンキの狩猟民は「伊特格特勒楞」と呼び、これは埋葬された人の汚れを取り除くことを意味する。跳神の前には白い小トナカイを殺し、白いトナカイがない場合には白い野鴨などを代用する。跳神の後、棺の木屑や死者の衣服、日用品などの残った埋葬用品を清掃し、これらをすべて焼き払う。これにより、汚れを取り除き、狩猟の順調を祈願する。

長期間獲物が捕れない場合も、シャーマンを呼んで跳神を行い、狩猟の運気の好転を祈る。この際、狩猟民は手巾や布をシャーマンの住居に掛け、2羽の飛龍鳥や野鴨を供物として持参する。また、柳の枝でトナカイの形を作り、「瑪魯神」の前に供える。「烏力楞」の全員が銃の弾薬を抜き取り、その物品を狙って撃ち、「撃ち取った！」と叫ぶ。その後、飛龍鳥や野鴨の皮を剥ぎ、心臓、肝臓、肺、舌、食道などを棚の上に置く。これにより運命を変え、狩猟が成功するようになると信じている。

シャーマンが儀式を行う際に着用する服はとても複雑で、独特なデザインと神秘的な色彩がある。シャーマンの服は鹿皮とヘラジカの皮で作られ、神帽、披肩、短上衣、神裙（ズボン）、神褲（パンツ）などで構成されている。特に神帽は複雑で、瓜皮形の丸帽に鉄環が組み合わさられ、十字形の半円環があり、後方には長方形の布帘が垂れ、十字環には二本の小さな鹿角が付

いている。シャーマンドラムには赤、黄、青の三色の円模様が描かれ、吉祥と幸運を象徴している。先端には獣皮が包まれ、槌の背には火の模様が描かれている。鼓槌はカモシカの蹄で作られている。

シャーマンの肩、披肩、袖には様々な祭物が吊るされており、これらは熊、狼、カッコウ、水鳥、白鳥などを象徴している。熊は祖先のトーテムを象徴し、狼は人間を傷つけるため畏れられ、カッコウや白鳥は暦を象徴している。他の民族のシャーマン服と異なり、エヴェンキ族はシャーマンを神の身体の再現と見なし、そのデザインには骨格、肋骨、関節、脊椎骨などが含まれている。脊椎骨は柳の葉の形をした木片で連結され、神衣の背中に掛けられている。神衣の脇下には七本の条状物が伸びており、これが肋骨を表している。胸前には鉄製の磨光鏡が掛けられ、頭には鹿角の神帽を被り、顔には仮面を着ける。

エヴェンキ族は男性も女性もシャーマンになることができるが、男性の場合は女性シャーマンのように装わなければならない。胸には女性の乳房を模したものを縫い付け、頭には女性を模したカツラを被る必要がある。また、シャーマンは非常に高い威望を持っている為、常に尊敬され、狩猟の名手であり、公正で能力のある人物でなければならない。氏族の首領がシャーマンの役割を担うことが多い。シャーマンの職は世襲制であり、各氏族にはそれぞれのシャーマンがいる。老シャーマンが亡くなると、その親兄弟や子供が継承し、兄弟や子供がいない場合は氏族内から後継者を選ぶ。

シャーマンとして認められるためには、一連の法術を学ぶ必要があり、修行期間は通常三年間である。この期間中に神帽、神衣、神鼓などの全ての法具を揃える。新しいシャーマンは通常、他の氏族のシャーマンに弟子入りし、毎年夏に三日間の「領神儀式」を行う。最初の年が最も重要で、まずトナカイやヘラジカを捧げてシャーマンの主神である「舍臥刻神」を祭る。「撮羅子」の火位の北側に二本の神樹を立て、左側にカラマツ、右側に栂樹を置き、二本の樹の間に皮の帯を掛け、その上にトナカイやヘラジカの心臓、肺、肝臓、食道などを吊るす。二本の大木の前に小さな松と栂樹を立て、血を塗る。「撮羅子」の左右に木製の月と太陽の象徴を掛け、東西にはガンとカッコウの象徴を掛ける。

すべての準備が整うと、新しいシャーマンは師匠に弟子入りし、法術を学び始める。四年目には、修業によって法術が高度な境地に達し、すべての法具も揃い、独立して宗教儀式を行うことができるようになる。

社会制度の違いにより、各民族のシャーマンの社会的地位と役割は異なるが、北方の少数民族においては、総じてシャーマンは高い威望と社会的地位を持っている。その地位を利用し、シャーマンによっては神職活動に対して報酬を要求し、高額な報酬を得ることもあった。そういったシャーマンは、宗教活動を職業とし、専門の神職者となっていた。一方、エヴェンキ族のシャーマンは「烏力楞」の一般的なメンバーであり、自己の力で生計を立てる労働者であって、シャーマン活動は社会的責任であり、報酬を受け取ることはなかった。

17世紀中葉にロシア帝国の東方進出が始まると、ロシア商人や農民との接触が増え、シャーマニズムは東方正教会の強い影響を受けるようになった。ロシア教会により、エヴェンキ族は徐々に東方正教の形式を受け入れ、復活祭を祝うようになり、教会で洗礼を受け、定期的に礼拝を行い、子供にロシア風の名前をつけ、結婚式でイエス像運び、亡くなった人を埋葬し十字架を立てるようになった。しかし、彼らが受け入れたのは東方正教の形式のみであり、その教義は真に受け入れられることはなく、シャーマニズムが依然としてエヴェンキ族の宗教信仰の中心であった。彼らの中で「我々の唯一の宗教信仰はシャーマニズムであり、祖先を信じ、神を信じない」といった言葉が残っているように、エヴェンキの狩猟民には教会も神父も牧師もおらず、洗礼や聖餐などの東方正教の活動内容を受け入れることはなかった。

しかし、20世紀初頭になると、このエヴェンキ族の大部分は激流河流域に移住し、50年代から60年代にかけて、彼らは次々と奇乾郷と敖魯古雅郷に定住し、シャーマンは徐々に歴史の舞

台から姿を消していった。この時期にはまだ 3 人の男性と 2 人の女性のシャーマンが存在し、時折シャーマンの儀式が行われていたようだが、80 年代中頃以降、シャーマンの活動は完全に停止し、最後の一人となった女性シャーマンが 1997 年 7 月 10 日に 85 歳で亡くなった。彼女は生前の 1986 年 10 月、呼倫貝爾市の民族事務委員会の招待を受け、関係者にシャーマンの全儀式を実演しており、これが最後の記録になったと考えられる。

以上、エヴェンキ族の原始信仰文化はトーテム崇拝とシャーマニズムが中心であり、熊やトナカイなどの動植物を崇拝し、シャーマンが儀式を通じて精霊と交流していた。トーテム崇拝は人類歴史上最も古い信仰の一つであり、氏族社会の産物である。熊は代表的なトーテムで、熊肉に対する複雑な手順や、熊送りの儀式を通じて深い敬意を示していた。また、シャーマンはエヴェンキ族の宗教的指導者として重要な役割を果たし、病氣治療や狩猟の成功を祈るための儀式を行っていた。長い間、自然崇拝、トーテム崇拝から靈魂崇拝、祖先崇拝、シャーマニズムの誕生に至るまで、東方正教の影響を受けながらも、原始宗教が彼らの精神世界を深く占めていた。しかし、社会経済の発展に伴い、エヴェンキ族の信仰も変化してきた。今日のエヴェンキ族はその伝統的信仰が繁栄した時代からどれほどの年月が経ったのか知るよしもなく、トーテム観念もほとんど消えていく。現在も残る様々な禁忌や儀式は祖先から受け継がれた慣習に過ぎない。20 世紀初頭に定住を選択し、歴史的地位の変化や漢族文化の浸透により、エヴェンキ族は何が自分たちのトーテムなのかを明確に答えることができなくなっている。シャーマニズムも次第に消え、80 年代中頃までにシャーマンの活動は終わってしまった。

## エヴェンキ族のシャーマニズムの近代化

近年、エヴェンキ族の文化資源は、途絶えてしまったシャーマニズムも含めて観光資源として注目されるようになっていく。その中でも特に参考となるモデルとして、フィンランドのポイリー社（Pöyry PLC）が内蒙古自治区呼倫貝爾市根河市の敖魯古雅鄂温克民族郷に対して行った総合計画が挙げられる。2006 年、根河市はポイリー社を招き、「敖魯古雅観光区開発総合計画」を策定した。この計画では、「敖魯古雅」（エヴェンキ語で「ポプラの森」を意味する）を少数民族のブランドとして位置付け、そのブランド力を拡大し、敖魯古雅を根河市の観光イメージおよび主要観光地として位置付けた。また、民族郷全体を 6 つの異なる機能区域に分けることが提案された。

2008 年には、根河市を挙げて舞台劇「敖魯古雅風情」を創作し、2010 年にはこの舞台劇が推進され、呼和浩特や北京でも公演された。CCTV の「我要上春晚」や湖南衛視の「快樂大本營」などの有名番組でも一部が放映され、全方位的な大規模プロモーションが行われた結果、ブランドの影響力が拡大した。このような取り組みの中で、民族歌舞などが新たな発展を見せた。エヴェンキ族は楽観的で前向きな性格を持ち、歌や踊りを得意とする民族であり、多くの歌舞形式を創り出してきた。そして、これらの形式にはシャーマニズムの儀式が多分に取り込まれている。代表的なものには、伝統舞踊の「努日給勒」や「天鵝舞」、「シャーマン舞」、「虹の舞」、「焚き火の舞」などがあり、舞姿は明快で美しく、呼吸のリズムに合わせて踊ることが特徴である。また、即興で歌詞をつけて歌う「紮恩達勒」という民歌の形式もあり、強いリズム感を持っている。エヴェンキ族の伝統楽器「木庫蓮」（口琴）や柳笛、シャーマンドラムなども演奏に使用される。

さらに、中国政府は観光支援政策を策定し、少数民族住民が観光産業に参加することを支援し奨励している。観光スポットの観光産業に対する定額補助を行い、観光プロジェクトや観光商品を次々と開発し、観光市場を拡大するための様々なインセンティブ制度を整備した。例えば、村民にエヴェンキ族の服装を着用して民族の歌舞を学ぶよう奨励し、生きた文化を日常生活

活に取り入れるようにしている。地元住民に観光プロモーションを学ぶ無料研修を提供し、それによって観光客に歌や踊りを教えたり、民族文化の飾り物のデザインを学ばせるなどしている。優れた成果を上げた家庭や個人には、資金的な奨励も行っている。

このようにシャーマニズムが形を変えて、芸能や観光資源などとして近代的に整備されることは、満族の「二人転」などでも見られる現象である。ここでは、一例として、呼倫貝爾市の小さな芸術サークル「エヴェンキ族小鹿芸術団」を取り上げたい。

筆者がそのサークルを初めて目にしたのは2019年で、インターネットの動画サイトで見かけたものであり、それはよくある地方の少数民族が、シャーマンの真似事をするようなものだった。しかし、2022年に春節の大型番組で同団体による「敖魯古雅」の演奏を偶然目にした際は、そのクオリティの高さに驚かされた。シャーマンドラムを叩きながら民族言語で歌って踊る姿は、従来の素朴な出し物とは異なった高度なパフォーマンスで、再現度の高いシャーマンの衣装に、精緻な舞台演出と洗練された技術が光っていた。そこで、同団体の出演に関して取材した劉銀（2022）、蔣肖斌（2022）の報道などから引用し、このサークルがどのような経緯で設立されたのかを紹介したい。

小鹿芸術団は、呼倫貝爾市出身の歌手ウナによって2013年に設立された。彼女は牧畜民の家庭に生まれ、かつて「赤の文芸輕騎兵・烏蘭牧騎」（モンゴル語で「赤い芽」を意味する）の一員だった。芸術団はエヴェンキ族の子供たちに伝統舞踊、歌、楽器を教えており、授業料は無料で食事と宿泊も提供している。最初は数名の生徒だったが、現在は約200名に増え、その大半がエヴェンキ族である。芸術団は国内外で公演し、中央テレビなどにも出演している。公演を通じて子供たちは成長し、二世団員も生まれ、民族文化が継承されている。エヴェンキ族は人口が少なく、約3万人しかいないが、民謡は彼らのアイデンティティと文化的自信の源泉となっている。

最初はウナ一人で子供たちに伝統舞踊、歌、楽器を教えていたが、現在では舞踊、音楽、口琴の先生も加わっている。設立当初、練習場所がなく、ウナは自宅や友人宅のガレージ、さらには屋外で子供たちと練習していた。呼倫貝爾市は冬になると氷点下30度にもなる厳しい環境で、草原では交通が不便なため、ウナは牧区の子供たちを自宅に泊めていた。

そのような状況の中、2016年、華熙グループが二階建ての練習場所の提供をした。華熙グループの総裁・趙燕は「子供たちに愛され、積極的に伝承される文化こそが未来の文化だ」と考え、伝統民族文化の発掘、伝承、普及に努めており、その一環での支援だった。さらに同グループは2022年に中国婦女發展基金を通して、「農村美術教育」の支援として楽器や自社製品を寄付した。小鹿芸術団はピアノ、口琴、羊皮ドラムなどの楽器や衣装に、寮も備えられている600平方メートルの新しい練習場の寄贈も受けた。このように官民を通したサポートを受け次第に環境が整っていった。

こうして小鹿芸術団は「定住」し、子供たちにとってここは学校であり家ともなった。10年の時を経て、「二世団員」も所属するようになり、元団員が舞踊と口琴の先生になっている。芸術団の最年少のメンバーは3歳半で、「大きい子が小さい子を面倒見る」という家族的なルールがある。ウナは「子供たちも私を家族の一員と見てくれています」と語っている。

小鹿芸術団では、民族芸術の学習に加えて、一般的な教育も行っている。ウナは自分たちの中国語と基礎教科の学習が十分でないと感じており、毎週土曜日と日曜日に授業を行い、その後は子供たちの学校の宿題を手伝っている。彼女は子供たちに「一生懸命勉強して、大学に合格し、踊りも数学も頑張りなさい」と何度も言っている。それは、上手に踊れるようになる為には、数学の能力も必要だという考えから来ているようだ。

ウナの「母親式」教育とは対照的に、口琴の教師であるソユレマはより現代的な教育方法と広い国際的な視野を持ち込んでいる。90年代生まれのソユレマは、内モンゴル師範大学の音楽学科を卒業した。大学卒業時に都市である呼和浩特市に留まるよう勧められたが、彼女は「私が



知っていることを子供たちに教えることで、民族の文化を伝承し発展させたいのです」と言って帰郷を選んだ。そして実際にソユレマは口琴の指導中に楽器や音楽の歴史と文化も教えている。エヴェンキ族の伝統文化は主に師弟間の口伝で継承されていたが、ソユレマは旧来の師弟関係に加えて、映像資料を使った新しい伝承方法も加えるようにした。更に伝統的な手法に現代の演奏方法を融合させることで、現代人に受け入れやすい民族音楽を目指している。

ソユレマは子供たちに「人は目標を持つべきだ。まず自分に目標を定め、それに向かって何をすべきかを考えよう」と語りかけている。その結果、子供たちは「何をどうやって学べばいいのか」と問題意識を持つようになり、やがて全員が大学進学之梦を持つようになった。最近では、2人の少年が内モンゴル芸術学院附属中等芸術学校の舞踊課程に合格するなど、成果を上げている。

こうした交流の中で、子供たちは自分たちの文化の独自性と、帰属感を感じているようだ。もちろん、歌や踊りにどのような意味があるのかの全てを理解しているわけではないが、「好きだ」という気持ちは持っている。文字を持たないエヴェンキ族には独自の歴史記録方法があり、口述歴史や民間伝承、特に民謡が伝統文学の一部を形成している。かつてこのような歌は広く存在していたが、徐々に若者たちは大衆音楽を好むようになり、忘れ去られていった。しかし、小鹿芸術団の活動に参加した若者たちが、伝統的な歌に親しみをもちはじめ、民族文化の価値を再認識し、民謡が新しい世代に受け継がれるようになった。

このように文化が近代化する背後には、エヴェンキ族の若者たちの努力がある。彼らは伝統文化の継承と発展を担い、民族の文化を現代的な形で再解釈することで、新たな魅力を提供している。例えば、伝統舞踊に現代的な要素を取り入れたり、シャーマニズムの儀式をエンターテインメントとして再構築するなどの試みがなされている。更に小鹿芸術団の活動は、子供たちにエヴェンキ族の伝統芸術を教え、それを通じて文化の保存と発展を図ることに繋がっている。

一方で、このような文化の再興を通じた近代化には課題も存在する。観光資源としての利用が進む一方で、伝統文化の過度な商業化が懸念されている。文化の本来の意味や価値が失われないようにするためには、地域社会と民間企業、行政機関の協力が不可欠であると同時に、その前提として、文化の本来の意味についての学習が必要である。エヴェンキ族の伝統文化を守りつつ、持続可能な発展を実現するための取り組みが求められている。

エヴェンキ族の小鹿芸術団の取り組みは、少数民族文化の保存と発展の両立において重要な示唆を与えている。フィンランドの企業による総合計画や、地元住民の積極的な参加、政府の支援政策など、多様な要素が相互に影響し合い、エヴェンキ族の文化資源が新たな価値を生み出している。この事例は、他の少数民族地域における文化の再興と発展の方法について参考になるだけでなく、同時にその過程で直面する課題の理解にも貴重な示唆を提供するだろう。

## おわりに

本稿では、エヴェンキ族のトーテム崇拝とシャーマニズムについての検討を通じて、その信仰形態と文化的背景、そして再興を通じた近代化の影響について考察した。エヴェンキ族のシャーマニズムは、原始的な自然崇拝を基盤とし、シャーマンを通じて神々と人間が交流する独自の宗教体系を持つ。彼らの信仰は、トナカイや熊といった動植物をトーテムとして崇拝し、これらの象徴的存在を通じて民族の結束やアイデンティティを強化してきた。

エヴェンキ族のトーテム崇拝とシャーマニズムは、厳しい自然環境と共生する中で形成されたものであり、その儀式や風習は深い精神性と宗教的意味を持っている。特に、トナカイや熊に関する祭祀は、エヴェンキ族の祖先崇拝と自然崇拝の象徴であり、これらの儀式を通じて彼

らは神々とのつながりを保ってきた。

しかし、20 世紀の初めからの社会的変遷や漢族文化の浸透、そして東方正教会の影響などにより、エヴェンキ族のシャーマニズムは次第に衰退し、80 年代中頃にはシャーマンの活動が完全に停止してしまった。このような状況の中で、エヴェンキ族の伝統的な宗教文化は消滅の危機に瀕していると言える。

だが、近年の観光資源としてのシャーマニズムを含めた伝統文化の再評価は、エヴェンキ族の文化の新たな価値を生み出した。民間企業による開発計画や、中国政府の観光支援政策、そして地元住民の積極的な参加が、エヴェンキ族の文化の保存と発展に貢献している。その中で生まれた「小鹿芸術団」の活動は、エヴェンキ族の文化的自信とアイデンティティの源泉となり、若者たちに伝統文化の価値を再認識させている。

これらの取り組みは、少数民族文化の保存と観光資源化などによる発展の両立を目指す上で伝統文化の過度な商業化に伴う課題も存在しているが、重要な示唆を与えている。

#### 引用・参考文献

中国語文献（中国東北地区のシャーマニズムに関する代表的な先行研究）

秋浦『鄂温克人的原始社会形態』中華書局, 1962.

秋浦『薩滿教研究』上海人民出版社, 1985.

郭淑雲『原始活態文化——薩滿教透視』上海人民出版社, 2001.

岳青「中国的薩滿教」『世界宗教文化』1981(1), 39-41(1981).

伍韜「薩滿教的變遷与衰落」『社会科学戰線』1981(3), 233-243(1981).

穀穎『滿族薩滿神話研究』東北師範大学博士論文, 2012.

仁欽道爾吉・郎桜『阿爾泰語係民族叙事文学与薩滿文化』内蒙古大学出版社, 1990.

鄭徳・陳捷「吉林省薩滿文化研究的新問題及遺存考察」『長春大学学报』, 30(1), 107-110(2020).

富育光『薩滿教与神話』遼寧大学出版社, 1990.

富育光『薩滿芸術論』学苑出版社, 2009.

富育光『薩滿文化析論』吉林大学出版社, 2005.

富育光『薩滿論』遼寧大学出版社, 2000.

富育光『滿族薩滿教女神神話初析』吉林大学出版社, 2005.

富育光・孟慧英『滿族薩滿教研究』北京大学出版社, 1991.

孟慧英『中国北方民族薩滿教』社会科学文献, 2000.

孟慧英『塵封的偶像——薩滿教觀念研究』北京出版社, 2000.

楊樸・楊暘『二人転与薩滿研究』社会科学文献出版社, 2016.

劉桂騰『滿族薩滿樂器研究』遼寧民族出版社, 1999.

劉小萌・定宜莊『薩滿教与東北民族』吉林教育出版社, 1990.

中国語文献（近年のエヴェンキ族シャーマニズムに関する論考）

斯格爾「馴鹿：從傳統到現代——傳統的發明与敖魯古雅鄂温克民族旅遊」『呼倫貝爾学院学报』, 25(6), 30-33(2017).

張豔「民族地区傳統文化的現代化建設研究——以敖魯古雅鄂温克馴鹿文化為個案」『理論觀察』, 190, 134-137(2022).

鄭麗楠・東傑夫・塗亜君「黑竜江省鄂温克族特色文化旅遊实践探索」『黑竜江民族叢刊』, 196, 74-79(2023).



董聯声「敖魯古雅“使鹿部”鄂温克人歷史上的図騰崇拜与薩滿崇拜」『呼倫貝爾学院学报』,25(1), 36-39(2017).

龔宇「中俄鄂温克族的原始信仰」『呼倫貝爾学院学报』, 25(2), 38-41(2017).

中国語文献（エヴェンキ族子鹿芸術団に関する報道記事）

劉銀「你們看見了嗎？小鹿芸術団上央视春晚啦！」『澎湃新聞』, 2022 年 2 月 1 日, (2022).

「潤百顏助力“鄉村美育”，守護最美芸術夢想」『南早網』,金融界 2022 年 7 月 29 日, (2022).

蔣肖斌「“小鹿”走出莫日格勒河」『中国青年報』, 2022 年 08 月 08 日, 6(2022).

韓国語文献

李命權（이명권）「중국 동북지역 샤먼문화 연구」『종교연구』, 74(2), 63-94(2014).

日本語文献（ロシア語文献の邦訳）

ウラジーミル・アルセーニエフ『デルス・ウザーラ』平凡社, 1965.

シロゴロフ『北方ツングースの社会構成』岩波書店, 1982.